

もとエジプトの伝承学者に所蔵されたが、当時「正統派の砦」といわれたダマスクスにもたらされ、この地の「伝承研究の学校」(Dār al-Hadīth)の一つでおこなわれた集会でよまれたものであることが、余白の記載によってしられる。本書の訳者ベン・シュメシュ博士は、専門法律用語をもちいた文章を解釈するのに細心の注意をはらい、そのため関係のある平

行史料との比較によって翻訳の正確を期している。アブー・ユースフ、アブー・ウバイド、クダーマ、ハテーブ、ベラーズリーその他の著書との対比がなされており、これによってつくられた訂正の一覧表が末尾につけられており、イスラーム諸国の現行法律條令表や種々の注釈・索引とともに、この価値高い労作の内容の理解を助けている。

“Antonino PAGLIARO : Letteratura della Persia Preislamica, Milano 1960.” への書評に寄せて

伊 藤 義 教

本書は Thesaurus Litterarum の第一部 Storia della letteratura di tutto il mondo (Antonio VISCARDI 監修)の第六巻 pp. 7~147 にあたり、Alessandro BAUSANI : Letteratura Neopersiana (pp. 149~898) と合本の形をとり、総合タイトルは Storia della Letteratura Persiana 『ペルシア文学史』で、巻末に索引がある。

この『イスラーム以前のペルシア文学』は I 『古代』とII 『中世』の二篇から成る。Iにおいて著者はまず、古代および中世のイラン文化の特色が宗教を中心として回転していることを指摘する。宗教とは、この場合、ザラツシュトラ教(以下ザ教と略記)のことである。古代にも文学的活動があったのに文学の形成を見な

かったのは、宗教的または神学的モチーフが枢軸となつてはたらき、このフィルターを通過し得たもののみが許容されたことと、もう一つは、楔形文字以外に実用文字のなかったためであるという。そしてアラム語が公用語とされ、やがてその文字がイラン語に適用され、アルシャク王朝時代にザ教聖典が文字をもってしるされる因をなしたという。ついでハカーマニシュ王朝の碑文の二、三に関する真偽の考証に入り、解読史を簡単に回顧して、以下、ダーレヨーシュ一世の重要な諸碑文およびクシェヤールシャー一世のデーフ崇拜禁止碑文を概観、その宗教史的意義を強調する。ついでアヴェスター(以下Av.と略記)に移るが、その取扱いにおいて著者の最も力説したところは、Av.とザンド(Zand)との関係である。著者によれば、Av.の最初の編集または義解はアラム語によ

って行なわれたといい、その論拠の一を *Dēnkart* (ed. by D. M. MADAN, Bombay 1911) p. 405, l. 21 以下に求めた。そしてここを、ザ教聖典 (*Dēnkart* とよばれている。上掲のものとは別) の一本で *Šiz* にあったものが、アレクサンドロス大王のイラン進入の結果、"ローマ人" の手におち、ユダヤ語に訳された、というふうに解説した。すなわち *𐭪𐭥𐭥𐭥𐭥* (p. 406, l. 2) を、一般に *yōnāyak* "ギリシア(語)" と改変して解説しているのを排し、テキストのままに *yuḏāyak* "ユダヤ(語)" すなわちアラム語と解し、"ローマ人" の手におちるとするのは、エルサレム地方がアルシャク王朝期に *provincia romana* となった時期と関連しているからで、ローマ人そのものを指しているのではないとする。そしてアラム語をこういうふう to 使用することについては、すでに事例があり、ビーストゥーン碑文のアラム語訳残簡がそのよい例であるともいう。解説は卓抜であり、解釈また新鮮である。そしてこのアラム語版がもととなって、アルシャク朝版やサーサーン朝版ザンド(口伝の Av. をふくむ) の成立をみるようになり、こうしたのちに、口伝されていた Av. の、Av. 文字による定着作業が行なわれたという。ついで Av. の西欧に知られはじめてからの歴史をみて、ガーサーや新体 Av. の概観を試みている。そのあと、ヘレニズム時代のイランとしてアルシャク朝期を瞥見し、II "中世" に移る。そして中世期におけるイランの諸方言を概説、主題をペルシア語に絞り、金石文の資

料から、筆を "サーサーン朝期の文化" に移していく。この文化事象の一として、アラム文字から中世ペルシア文字が出来、本来の意味の文学がうまれてくることを説くが、文字の行書化がすすんで文字の間に区別がなくなり、同一の文字が多く音価を帯び、それに加えて、中世ペルシア語そのもののもつ形態法や文体論上のアイマイさ、"宗教語" としての特異性などが、現存テキストの解説をはなはだしく困難にする点を指摘している。ことに、この最後の点はザ教が国教化されたことと関連があり、国教化は Av. をめぐる幾多の神学的著作活動を誘発し、ひいては九、十世紀(ノ)の交に一のピークを画するに至るのである。ついで、中世ペルシア語、いわゆる "パフラヴィー語文学—その性格と命運" (p. 79 以下) の項下では、広い意味での宗教 "文学" の成立、それと密接に関連する教訓文学、譬喩文学、それとは別に、大王の宮廷と関連のある、宗教外の文学、さらに詩文学や歌謡などと多彩な展開がみられたが、しかし、宗教外の文学でさえもザ教祭司の圏外に立つ純文学という域には遠く、また詩文学や歌謡にしても、文字によって伝えられなかったために多く失われ、またかゝる伝統があったにしても(文字は、サーサーン朝時代では貴族の教養の一部をなしていて、ザ教祭司の独占でなかった)、回教による征服後は、ザ教関係の文献を救うということが最大の関心事となったがために、結局は同じ運命をたどるほかはなかったと強調する。この綜括的観察ののちに、上述の線に沿って個別的取扱いにうつり、宗教文学関係

では、"…… Av. の繙訳" (p. 83 以下)からはじまって "Dēnkart 書" (p. 86 以下)、"Bundahišn 書" (p. 92 以下)、"その他の神学書" (p. 97 以下)を経て、"終末論書" (Dātistān i Mēnōk i xrat, Artāy Vīrāp Nāmāk) (p. 105 以下)、"予言書" (Zand i Vohuman Yasn, Ayātkār i Jāmāspik) (p. 111 以下)、"儀法と習法の書" (Šāyast-nē-šāyast, Rivāyat, Dātistān i dēnīk 附属の Rivāyat) (p. 116 以下)、"論説の文学" (いわゆるアンダルズ文学 — p. 120 以下)、"一千判例の書 (Mātiyān i hazār dātistān)" (司直にもザ教祭司が関与した — p. 126 以下)、"教訓と教養の文学" (p. 128 以下) におよび、ついで "教外文学" (p. 131 以下) にうつり、"バビロニアの木" (これは位争いの文学)、"ザレール伝"、"アルタクシェールの行伝"、"将棋の解きあかし" を取扱って巻を結んでいる。その間、これらの文献の部分的訳出をも挿入して理解に資しているところも少なくない。

さて、本書を読んで痛切に感ずることは、古代や中世のイラン文学史を一般読者むけに書こうとしても、独自の見解を打出し専門的議論を展開して特殊課題と取組まなくては、これを果たしえないということである。本書においても、Av. と Zand をめぐる問題について、Dēnkart 書への独自の解説が試みられていることは上述したとおりである。本書はそういう課題を内包しながら、最新文献の援用にも周到な

注意を払いつつ、イラン古代および中世の新鮮な文学像を読者に提供しようとし、そしてそれに成功を収めた点に特色を有している。しかし、p. 82, l. 5 にみえる Zarēr は Bastvar のあやまりであって、ここは Vīdrafš に倒された父 Zarēr のなきがらを戦場に見つけたとき、いたいけな英雄たるその子 Bastvar が悲嘆に沈む場面であるから、…… l'eroe fanciullo Bastvar (Zarēr でなしに)、quando ritrova sul campo di battaglia il corpo del padre, Zarēr, ucciso dallo stregone Vīdrafš. とあるべきであろう。このような微瑕はともかくとして、たとえば p. 41. において、中世ペルシア語書に混書訓読されていたアラム語詞、いわゆるウズワーリシュン(訓読語詞)の発端が西紀前二世紀中頃にみられるとする W. B. HENNING 教授を引いているところなど、細部においては、まだ問題があるだろう。というのは、HENNING 教授 (Handbuch der Orientalistik, Erste Abteilung Bd. IV IRANISTIK — Abschnitt 1 LINGUISTIK, Leiden 1958, p. 25 — たゞし教授は 1956 年 11 月に稿了されている) はパールス (ペルシス) の小王の錢文 D'RYW MLK' BRH WTPRDT MLK'、"ワートフラダート王の子ダーラウ王" に見える BRH (b^er-eh) が本来は "かれの子" を意味するから、それを単なる "子" の意味で用いることは誤用であり、したがって BRH はすでに表意語詞 (訓読語

詞)となっているとされるもののようであるが、エジプトの太守アルシャーマがシューシャー(スーサ)からエジプト駐在のペルシア人の役人アルタワントに発したアラム語書簡(西紀前五世紀)では、"アフハッピーの子ブサムシユク"が Psmš̄k BRH ZY 'h̄hpy (Psamš̄ek b'̄r-eh zī 'Ah̄-hapī)と表現されているという事実があるからである(G. R. DRIVER: *Aramaic Documents of the Fifth Century B. C.*, Oxford 1957 [2. ed.], Letter II, l. 2 [p. 22, 42 f.])。また Nisā 出土のオストラカや Avrōmān 文書(アルシャク紀元300年の日附をもつもの)をもパルティア語とみているが(p. 68)、そのねらいは誤っていないかもしれないけれども、全文がアラム語としても読めるということには注意が払われていない、というよりも、この点もまたヘニング教授(上掲書 p. 27 以下)に依ったものである。しかし、ヘニング教授がたとえば、Nisā 出土のオストラカに "太守の掌中に" が LYD PHT' であったり LYD hš̄trp であったりするところから、この^{オストラカ}陶文書は中世パルティア語であり、PHT' は xs̄ahraβ (hš̄trp) "太守" のウズワリーションであるとしているけれども、"太守"のごとく術語に近いものは、イラン語音をそのままアラム語文に借用するということもありうるから、hš̄trp の形でアラム語文に混書されることは可能であり、したがって PHT' をそのウズワリーションと断ずることも、一考を

要することではないだろうか。

また、われわれは本書をよんで、ペルシア式楔形文字法がたれの創案にかかるかということをも、もう一度考えてみたことであるが、このことには、いろいろな問題がからんできて、必ずしも完全に解答が与えられるという性質のものでもない。しかし、この問題の出発点が少なくとも、ダーレヨーシュー一世のビーストゥーン碑文ペルシア語版第4欄88~92行(通算570)と、そのエラム語訳とにあることは、まちがいない。ところで、このペルシア語版の難解さは、欠損部の少なからぬこと、ハバクス・レゴメナ(一度しか出てこない語詞)のあることなどに基づくもので、その欠損部の再構がいかに不安定なものであるかは、R. G. KENT: *Old Persian — Grammar, Texts, Lexicon*, New Haven 1950 をその再版(1953)と対比してみるだけでも明らかであろう。両版では再構の結果が、はなはだしくちがっているのである。しかも、再版の再構は G. G. CAMERON 教授が碑文の实地について精緻な検討をとげた結果に基づいているが、それでさえも、なお疑問があり満足すべきものではない。碑文がアリア語(すなわち古代ペルシア語)で書かれたということと、その写しが帝国の各地に送達されたということ——この二点だけが明らかであって、その他の細部は、文字どおり晦渋の一語につきる。この点、われわれも PAGLIARO 教授と全く同感である。もっとも、ここに出る pavastāyā (単数於格)を教授は KENT と同じく "泥板に" と

解しているが、pavustā- はその中世語形 pōst と同じく、「皮革」と解する方が望ましい。中世語書では、たとえば一万二千枚のなめした牛皮 (gāv-pōstīhā) に金泥でアヴェスタが書かれていたなどともいい、またハカーマニシュ宮廷でこのような皮革を紙の代りに使っていたことは、エズラ記 6₂ (エステル記 6₁ をも参照) から、これを知ることができる。

Wilhelm BRANDENSTEIN ~ Manfred MAYRHOFER も同じ意味に解している (Antiguo Persa — Gramatica, Inscripciones por W. BRANDENSTEIN con un Lexico etimologico por M. MAYRHOFER, Madrid 1958, p. 127)。

ところで、ビーストゥーン・ペルシア語版 IV 89 (§70 の一部) : i(ya)m dipīmai yīy(ām) adam akunavam patišam ariyā āha 「これが余のつくったわが碑文であり、そのうえ、それはアリア語であった」¹ に対するエラム語版をみると、^{mu} d^{et} tuppi-me taie-ikki kutta harriyama, appo sassa inne enri 「余は碑文をアリア語で別様につくった、そのことは以前には絶無であった」² とある。この句の後半はペルシア語版には欠けているものであるが、ビーストゥーン鑿崖のダーレヨシュ一世とそのうしろに弓を携えて控えている従者との上方に、はっきりと造刻されているから、疑問の余地がない。そうすると、ダーレヨシュ大王は、おそらく、ペルシア式楔形文字法を案出せしめ、

これを用いてアリア語 (古代ペルシア語) をはじめて書かしめたものとなるだろう。かれが碑文にこのように陳べていることは、必ずしも架空の誇示でない。というのは、その下に、この碑文の写しが各地に送達されたと言ひ、しかも、このビーストゥーン碑文のアラム語訳残簡がナイル河中の小島エレブエンティネーで発見されているからである。

そうすると、つぎには、大王以前の碑文として知られる数種のものは、どう扱われるべきであろうか。もっとも新しい意見を代表するものとしては、PAGLIARO 教授と BRANDENSTEIN 教授を挙げることができる。前者は上掲書 p. 17 以下において、ダーレヨシュ一世以前のもので、(1) アリヤーラムナ (大王の曾祖父) や (2) アルシャーマ (大王の祖父) のものは諸種の点からみてアルタクシャシャ二世時代の偽作とする説に賛し、これに反し、(3) クールシュ二世のものには信憑性をおき、結論としては、クールシュ二世時代にペルシア式楔形文字法が成立し、ダーレヨシュ一世によって大量大規模に使用されはじめたものと解している。これに対し、BRANDENSTEIN 教授 (上掲書 p. 10) は、ビーストゥーン碑文ペルシア語版 IV 89 と上掲エラム語訳とを併せ考えて、ダーレヨシュ大王以前の碑文をすべて、あとから造刻奉納したものであると、端的に結論している。

まず、上の (1) および (2) であるが、これはハマダーンで発見されたもので、全体を通じて目につくことは破格の多いことである。

単数主格が同属格や於格の代りに用いられたり、関係代名詞単数対格中性形が同男性や女性形の代りに登場していて、すでに中世期のイザーフェ^{ti}の用法に近いなど、曲用を失っている時期の語形を思わせるものが多い。このような曲用語尾の喪失、つまり曲用のすたれはじめた時期はすでにアルタクシャシャ二世の時代にみられる(BRANDENSTEIN 上掲書 p.16)。またこの(1) および(2)の末尾が同二世のハマダーン碑文 c, ll. 15~20 と用語や文体のよく似ている点も注目される。

(1)の末尾は "オーラマズダーの御意によって、余はこの国に王たるものである。……オーラマズダーが余に佑助をもたらしたもうように。"

(2)の末尾は "オーラマズダーの御意によって、余はこの国を掌握している。オーラマズダーが余を守りたもうように、また余の(王)家を、また余が掌握しているところのこの国を、かれの守りたもうように。"

これに対し、アルタクシャシャ二世の上掲碑文の ll. 15~20 は "オーラマズダーの御意によって、余はこの大いなる大地に(涯)遠くまで王たるものである。オーラマズダーが余を守りたもうように、また余にかれの授けたもうた王国を、また余の(王)家を。" となっている。そこで、(1)および(2)がハマダーンで発見されたとしても、そこが真の故地ではなく、他所から将来されたのではないかとして、よくストラボーンの "地誌" XV 3₉ が引用される。これによると、アレクサンドロス大王は

インド遠征に先きだって、シューシャー(Cūsā^{スーサ})やペルセポリスの王の宝蔵から財宝をエクバタナ(ハマダーン)に集めさせたことがみえている。

さて、そのつぎは(3)大王クールシュ二世のパサルガダエの碑文(KMa, b, c)である。KMというのはクールシュ大王のモルガーブで発見された碑文という意であるが、パサルガダエの廢址は、正確には、その東北12 kmにあるモルガーブの町に対し、特にメシュヘデ・モルガーブとよばれているものである。ところで、ここの碑文はいずれもきわめて短く、またクールシュは単に "王" というだけで "諸王の王" とはいっていない。すると、かれがまだメディアの宗主権をみとめていた時期のようにもみえる。もしそうだとすれば、ダーレヨージュ一世以前における楔形文字によるペルシア語表記ということが、当然、肯定的に考えられてくる。のみならず、メディア王朝時代にメディアを通じてそれが導入されていたのではないかという考え方も、提唱される。このような立場を援護するように見えるものは、古代ペルシア語 fraθ- "罰する" に対するアッカド語訳である。すなわち、ビーストゥーン・ペルシア語版 IV 38 (§ 55) の avam …… parsā^サ "かれをなんじは罰せよ" は ^{sal}sal-^{su}su, ダーレヨージュ一世のナクシェ・ロスタム碑文 b, ペルシア語版 l. 19 の parsā^ミmiy "余は罰する" は alta' al (-^{su}su) とそれぞれアッカド語訳されている。alta' al は ^{asta}asta' al と同じものであるから、^{sal}sal(-^{su}su)

とともに、 $\check{s}alu$ / $\check{s}a'alu$ "かれは問う" (Arab. $sa'ala$, Aram. $\check{s}'al$, Hebr. $\check{s}a'ail$) に属する。 $\check{s}alu$ は "問う" 謂で、"罰する" 意味には用いられない。また、もっぱら "罰する (< 問いたです)" の意味にしか用いられない O. P. $fra\theta-$ の、対応アヴェスタ語形 $fras-$ は、"問う" の意味がふつうであるから、メディア語でもそれに近かったであろう。そうすると、アッカド語訳は、ペルシア語とのつながりよりも、メディア語とのつながりが、より密接であったことを示しているわけで、この点から、ダーレヨーシュ大王のみならず、クールシュ二世よりもさらに古く、メディア王朝時代にアッカド語とメディア語との結びつきが考えられ、ここからも楔形文字の早期導入の可能性が主張されうるのである。

また、ハカーマニシュ王朝の大王には生前、じしんの王墓を造営し、碑文を造刻するの風があった。こういう方面から、クールシュ二世の王墓に碑文が造刻されていたという、実地の見聞録がのこっているのは注目されてよい。これには典拠が二つある。(1) はオネーシクリトス、(2) はアリストブ羅斯で、ともに、アレクサンドロス大王がクールシュの王墓を視閲するのに随行している。ストラボンの "地誌" XV, 37~8, アッリアノスの "アレクサンドロスの遠征記" VI, 29, 1, 4 ff., プルルコスの "アレクサンドロス" LXIX, 8 参照。いまは、その所伝の内容やそれへの論評などに立ち入る紙幅もないが、クールシュ大王の王墓に碑文がペルシア語でも造刻されてい

たことは、史実とみななければならぬ。そうすると、いよいよダーレヨーシュ一世以前からペルシア式楔形文字が使用されていたかにみえるのである。

しかし、このようなデータを大局的に考察してみると、やはり、ビーストゥーン碑文におけるダーレヨーシュ大王の所言をもって根拠のあるものとみる方が、至当ではないかと思われる。クールシュ二世の現存の碑文は極めて短文であるし、同王墓にあったと伝えられる碑文も、アリストブ羅斯を典拠とするような長文のものではなく、オネーシクリトスに基づく極めて短文のものであったに相違ない。後者によれば、"ここに余、諸王の王キウーロス横たわる" とある。この表現が、そのまま、ペルシア語のそれを忠実に写したものでないことは否定できないが、この種の極めて短いものであったろうことも、これまた否定できぬところである。また、O. P. $fra\theta-$ とアッカド語訳との関係は、上に述べたような方向において捉えるよりも、アッカド語へペルシア語を翻訳していた翻訳学派の立場と関連させて考える方が、より合理的である。アッシリアやバビロニアではメディア人が高い地歩を占め、メディア語を基盤とするホンヤク学派を形成した。かれらは、訳出不能なペルシア語詞でも、それをペルシア語形で示さずに、メディア語形で示した。だから、Bardiya (カンブジャ大王の弟) でも、アッカド語版では Barzi'a としてメディア語音でうつしている (d : z)。この学派が、O. P. $fra\theta-$ の対応メディア語形 * $fras-$

の直訳的アッカド語訳 šālu / ša'ālu を形式的にも求めたことは、当否は別として、自然の成り行きであったかも知れない。メディア時代にメディア語へ楔形文字が適用されていたならば、ハカーマニシュ王朝の碑文にもメディア語版が登場したであろう。サーサーン王朝初期の「大王」の碑文には、ペルシア、パルティア、ギリシアの三語が併用されている。ハカーマニシュ王朝の場合は、エラム、アッカドの二語がパルティア、ギリシアの二語にあたるのであればそれまでであるが、メディア語版のないことは、メディア語が書かれることばとしては、まだ開拓されていなかったことを示唆するように思われる。このように見てくると、クールシュ二世に関連のある碑文をも、あとから造刻奉納されたと見做しても、それを積極的に論駁する根拠は少なくなる。またビーストゥーン碑文(B. C. 519の造刻とみられる)のみが語詞間をわかつ記号に < を有し、単に 𐎠 を有する他の諸碑文と趣きを異にしている点も、この碑文がペルシア式楔形文字法(イラン式といってもいい)の最初の適用であることを思わしめる。

では、この文字法を実際にはたれが創案したものであろうか。論ずれば多くの紙幅を費やすこの課題に、ここでは深く立ち入ることを避け、結論のみを挙げるにとどめたい。われわれが古代ペルシア語碑文を読んで強く感じることは、その文体がセム語の影響をうけている点である。絶対主格などとよばれる構文が、ことにそうである。たとえばビーストゥーン碑文ペルシア語

版 IV 38~39 (§ 55) martiya hya drauḵana ahatiy — avam ufraštam parsā 「虚偽の保持者であるひと —— そのものを強くなんじは罰せよ」である。アラム語訳残簡を参照してみると、このペルシア語構文は、アラム語では 'iš zī y^ekaddib — 'saggi ' 'āns[∇]-eh あたりに相当するだろう。先行した主語(主格) martiya / 'iš を、もう一度承先詞的代名詞 avam / -eh でうけて再説するのである。この場合、セム語といえはアッカド語でもありうるが、諸般の事情からみて、アラム語がそれに優先する。このような点からみて、古代ペルシア語版はアラム書記官の手で起草されたものではなからうか。G. G. CAMERON 教授は —— そして A. PAGLIARO 教授もこれに賛している —— むしろアラム語でまず起草されたという考え方であるが、それよりも、われわれはむしろ、アラム人の書記官によってペルシア語版が起草されたものと考えたい。アラム人の書記官がすでにアッシリアのニニヴェの官房その他にいたことは周知のことであるが、イランの場合、かれらが枢要な地位を占めていたことを証する事例の一つとして、われわれはここで、中世ペルシア語書 Ayātkār i Zarērān 「ザレールの伝記」を挙げることができる。これによると、ヒヨン(フン)のアルジャースプ王がイランのウィシュタースプ王にその信仰(ザラツシュトラ教)を放棄するように要請し、もし従わねば戦端の開かれることを警告した書簡を送付する。これを受けたイラ

ン側では、『書記官の長イヴラーヒーム』(Iṣrahīm i dibīrān mahist) が立ってウィシュタース王の前にこれを読みあげるといふ一節がある。この書は流布本の前にパルティア語で書かれたテキストがあったものとみられ、またその内容の一部はパルティア王朝(アルシャク王朝)の盛時、西暦紀元のはじめごろの状況を伝えるものと考えられている。書記官長といえば政治の枢機に参画した要職であり、そこにイヴラーヒームが任じているのである。かれがアラム語をはなす人物であったことは、改めて言うまでもない。このような事情からでも、ペルシア式楔形文字法がアラム人の手に成ったことを、われわれは推察しようとするものである。

ここで古代ペルシア語に関する問題をはなれるにあたって、上で触れた、ブランデンシュタイン教授の文法書について一言したい。書名からでもわかるように、『古代ペルシア語』について同教授が文法を書き、それに練習用として二、三の碑文を抜萃してかかげ、最後にMAYR-HOFER 教授の手に成る、語源付きの語彙がつけられている。マドリード大学の Antonio TOVAR 教授が監修する Manual de Lingüística Indoeuropea の第三巻にあたる。原共著者のドイツ語版はなく、このドイツ語草稿を TOVAR 教授がエスパニヤ語に訳出したもののみが上梓されたわけであるが、語彙(BRANDENSTEIN 教授の特別な意見がある場合は、その旨特記されている)では、便

宜をはかって、特に、ドイツ語訳も付されている。もっとも、それはただペルシア語の訳語だけで、説明は全部エスパニヤ語訳のみで行われている。さて、本書を通観して感じる第一の難点は、おそらく誤植とみるべきであろうが、そういった意味でのあやまりがはなはだ多いことである。それは、『序言』の冒頭からはや逢着する。すなわち、p. 3, ll. 17~18 Irán (*Aryānā < np. Ērān 'Irān') である。これは Irān (< mp. Ērān 'Irān' < *Aryānām) とあるべきである。30個をこえるこの種のあやまりは初学者を迷わしめるには足るが、なおかつ、本書の価値を全的に消滅させるには遠いとも言うことができる。このように言うことが必ずしも不当でないことは、『序言』の第四節(pp. 9~10)をみてもうなずけるであろう。以下にこれを訳載してみよう。〔 〕内はわれわれの補筆であるが、必要最小限度にとどめたことはいうまでもない。

古代ペルシア語に関する文献は極めて豊富である。しかしここでは、もっとも重要なものしか挙げられない(他の参考資料は引用書目に載っている)：

F.H. Weissbach: *Die Keilschriften der Achämeniden* (Leipzig 1911) は三語(古代ペルシア、エラム、アッカド)のテキストを挙げてそれをドイツ語に訳している；著者は新版を準備していたが、1944年Leipzigの爆撃で原稿を救おうとして爆死した；R.G. Kent: *Old Persian*

— *Grammar, Texts, Lexicon* (New Haven 1950) はペルシア語テキストだけを最新の成果に基づく形で挙げ、それに英訳を付したもので、再版を予告しているが、著者は1952年没した〔この再版は初版と書名も同じで、ただ Second Edition, Revised と付加して1953年New Haven から出版されている〕; F.W. König: *Relief und Inschrift des Königs Dareios I. am Felsen von Bagistan* (Leiden 1938) は詳註を付してドイツ語訳だけを示している; E. Herzfeld: *Aftpersische Inschriften* (Berlin 1938) は今なお重要である。

文法書ではまず R. G. Kent を挙げねばならぬ(上記参照); Meillet—Benveniste: *Grammaire du Vieux perse* (Paris 1931) はすでに古くなっているところがあるが、当然のこと。*Grundriss der iranischen Philologie* I. Band, I. Abteilung (Strassburg 1895—1901) にある Chr. Bartholomae の解説〔I. *Vorgeschichte der Iranischen Sprachen* と II. *Avestasprache und Altpersisch*〕は共通アリア語からあとの発展を説き、依然として基本的なものとなっている。

W. Hinz の辞書 *Altpersischer Wortschatz* (Leipzig 1942) は純粹に記述的であるが、逆の場合もみえる。Chr. Bartholomae の *Altiranisches Wörterbuch* (Strassburg 1904) はその当時知られていた資料(といっても《間接所伝》すなわち他の諸語からわかるイラン語詞は含まれていない)を、^{テサウルス}百科事典の形で含んでいるが、著者のとった配列法がひどく複雑なために、利用しにくい。Kent の上掲書は語源を挙げた語彙をも含んでいる。W. Eilers の著書 *Iranische Beamtennamen in der keilschriftlichen Überlieferung*, I (Leipzig 1940) には新資料が含まれ; H. S. Nyberg の *Hilfsbuch des Pehlevi* (二部〔Bd. I: Texte und Index des Pehlewiwörter; Bd. II: Glossar. それぞれ〕Uppsala 1928, 1931) は重要で、その辞彙には語源の考察も試みられている。M. Mayrhofer の *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen* (Heidelberg 1956—) は引きつづき刊行されている。〔本書は目下 Lieferung 14 (1960) bhartsayati の項まで出版されている〕。

語研究に対する詳細な啓蒙的批判は H.

Reichelt が *Erforschung der indogermanischen Sprachen* Band 4, 2. Hälfte ("Iranisch") (Berlin 1929) で試みている。*Zeitschrift für Indologie und Iranistik* (I—X, [Leipzig] 1922 — 1935) では、H. Reichelt と P. Tedesco との論文に重要なものが含まれている。方言論では、今では J. Harmatta: *Studies in the Language of the Iranian Tribes in South Russia* (《Acta Orientalia》I, Budapest 1951, pp. 261—314) と L. Zgusta: *Die Personennamen griechischer Städte der nördlichen Schwarzmeerküste* (Praha 1955) を挙げねばならぬ。全般的に重要なものは E. Herzfeld: *Archaeologische Mitteilungen aus Iran* I—VII, [Berlin] 1929 — 1935 である。そのほかにも指摘してみると: F. Altheim: *Geschichte der lateinischen Sprache* (Frankfurt 1952), p. 84 ff. と地図 I (ペルシア人の移住分布に関するもの) があり; G. G. Cameron: *History of Early Iran* (Chicago 1936) も、F. W. König: *Älteste Geschichte der Meder und Perser* (Leip-

zig 1934) とともに挙げる事ができる。H. H. Schaeder: *Das persische Weltreich* (Breslau 1941) はすぐれた解説であるが、むしろ一般向きである。A. Christensen: *Die Iranier* (《Handbuch der Altertumswissenschaft》III 1, 3, 3, 1, München 1933) はあらゆるテーマを圧縮的に取りあつまっている。H. S. Nyberg の著 *Das Reich der Achämeniden* (《Historia Mundi》, Bd. III, Bern 1954, pp. 56—115) にも同様のことがみえる。Erich F. Schmidt のモノグラフ *Persepolis I, Structures, Reliefs, Inscriptions* (The University of Chicago Oriental Institute Publications, vol. LXVIII, Chicago 1953) は多数の図版を付した豪華版である。〔続編は *Persepolis II, Contents of the Treasury and other discoveries* (The Univ. of Chicago OIP., vol. LXIX, Chicago 1957) 〕。

さて、PAGLIARO 教授の "イスラム以前のペルシア文学" は、E. G. BROWNE: *A Literary History of Persia*, vol. I, New York 1902 (reprint: Cambridge 1951); A. CHRI-

STENSEN: *Heltedigtning og Fortaellingslitteratur hos Iranerne i Oldtiden*, København 1935 および *Les Gestes des Rois dans les Traditions de l'Iran Antique*, Paris 1936; J. C. TAVADIA: *Die Mittelpersische Sprache und Literatur der Zarathustrier*, Leipzig 1956 とつゞく一連の文献~文学史の最後に位する最新の文献であるが、われわれはまた、これらの文献を併読することによって、イラン学進展の歩度の小ならざることにも、改めて想到するであろう。またこのパリアーロ教授の著にわずかに先行して、やはり新しいイラン文学史が上梓されている。すなわちチェコス

ロヴァキアの J. RYPKA 教授が O. KLÍMA 博士らの協力で作成したもので、ドイツ語版は *Iranische Literaturgeschichte* として 1959 年に出版された。しかしこれについては、改訂版が目下チェコ語で進行中であり、傍ら英訳も並行的にすすめられているから、その上梓を待つて改めて触れる機会をもつこととしたい。

なお、A. PAGLIARO 教授は 1898 年イタリアのミストレッタ市(メッシーナ)に生まれ、フィレンツェに学んだのち、ハイデルベルク(ドイツ)に転じ、Chr. BARTHOLOMAE 教授について言語学とイラン学を修めた。1925 年いらいローマ大学にあって、現在は同大学教授、イタリアにおける古代・中世イラン学界の耆宿である。

海 外 消 息

伊 藤 義 教

ブラハの Jan Rypka 博士(Praha 5, SM / CHOV, Holečková 17) のあっせんによって、(A) 東ドイツと (B) チェコスロバキアとから、それぞれのイラン学関係の資料について、下記のような消息がもたらされた。博士じしんは目下、イラン・タジク文学史の改訂チェコ語版の印刷に忙殺されているので、博士の委嘱をうけて、(A) は Werner Sundermann 博士(Vorderasiatisches Institut, Berlin

W 8 [DDR], Unter den Linden 6) が、(B) は Otakar Klíma 博士 (Orientální ústav, ČSAV, Praha 1, Malá Strana, Lézeňská 4) が担当されたもの。雑誌所載の諸論文はすでに学界承知の向きもあるはずであるが、あえてそのまま収録した。なお、Rypka 博士じしんには、(A) (B) に収載されたもののほかに、つぎのものがある。ただし、20 におよぶ書評や、その他トルコ語関係の論文ならびに多数の小論は含まれていないと、博士はこ

とわっていられる(筆者あての書簡):
Bābā Afdal. Eencycl. of Islam. I 838—9 (1958).